

## 陳述書

柳沢文昭

国際社会においてそれなりの重みを有する一国の首都の長の妄言として、長く記憶されるであろう「フランス語は数を勘定できない」発言は、フランス語の数詞システムの特徴的な一面、つまり、二桁の後半の数の表現に残る非十進法的習慣がフランス語学習者にとって悩みの種になっているという事実を指しているのである。初學者泣かせの要素はこれ以外にも数多くある。名詞・形容詞の性変化、性・数の一致、煩雑きわまる動詞の活用、綴り字記号、発音しない子音字、12個もある母音、等。だがこれらは、数表現も含め、解消されるべき欠点や修正されるべき弱点ではない。まして学習者を拒む特別な障害でもない。ある外国語に初めて接する者にとっては、その外国語のすべてが困難な障害であり、その障害の克服の努力を通じて学習者の知性と感性が陶冶される場所に言語の学習の意義の一つがある。要するに、それらはいずれも一言語の個性を作る要因であり、言語はそれらなくしてはアイデンティティを失う。数表現において十進法を一貫して用いる日本語は、数を勘定しやすい言語だ。だが、数える対象の種類によって、一個、二冊、三本、四人、五台、等、単位を付け替える必要があるので、われわれの言語は外国人には、ものを数えられない言葉と映る。だが、われわれが幼い頃にさしたる困難も意識せず身につけるこの数え方を日常の言語習慣から抹消したら、日本語の輪郭は少なからず歪むだろう。

言語には、その個性により、また学習者の文化的背景の違いにより、学びやすいと感じられるものと学びにくいと思えるものがある。だがそれは、言語自体の優劣を決定する根拠ではない。またどのような言語も人格と同様、それ自身で完結した全一的統一体であろうとするものであるから、どちらかの価値を全面的に否定しない限り、二つの言語のあいだの優劣を云々することはできない。東京都知事の発言が問題視されるほんとうの理由は、その発言がフランス語についての無知な見解、誤った認識を含む点にではなく、文化論的に不可能で、かつ倫理的にも推奨され得ない言語の優劣の判断をあえて下そうとしているところにある。むろん知事発言には、フランス語が英語より（あるいは中国語より、または日本語より）劣るという文言はない。だが発言は、その発言を構成する語句のみによって意味を持つのではなく、その発言行為のあり方によって、つまりその発言が、いかなる文脈で、いかなる聴衆の前で、いかなる利益を目指して、または、いかなる利益に抗してなされたか等の要件によってもメッセージを発する。この発言の場合、後者のメッセージ性のほうが前者の意味よりも明らかに強い。これは「首都大学東京の支援組織」の設立総会において、その設立構想に関し知事と見解を異にする教員をターゲットとして、その教員たちの学的専攻分野と担当科目に劣等のレッテルを貼り、その価値を恣意的に貶めれば、彼らの見解の正当性に打撃を与えられるとの目論見のもとになされたのは明白だからだ。

このレッテル貼りの対象になっているのは実は「言語」ではない。それは一つの文化、その文化圏に生きる人間、また、その文化圏に生来的には属さなくとも、その文化との関わりを無上の喜びとする個人々人を狙っている。言葉とは、精神としての、あるいは意識としてのわれわれの存在そのものの素材であり、その限りで人間のすべての文化の基盤をなすからだ。つまり石原発言なるものは文化的人種差別の意図の誇示に他ならない。そしてそれが「都知事たる公務員として発言したものである」というのなら、このような差別的意図は東京都の公式のイデオロギーということになる。かつてそこに暮らし、多くの友人をそこに持ち、また特にフランスの友人をしばしばそこに迎える者として、私は、東京都のこのような意図の表明、およびそれに対する反省の欠如のうちに、一個の文明圏を代表するはずの都市にあるまじき愚かさと同時に、その都市にいくばくかの愛着を寄せる内外の人々に対する侮蔑を、怒りと失望と悲しみとともに見出す。

「国際語」。この単語は石原発言中、最も虚しく響く。その理由は、この単語が単数形で用いられているからだ。もっともそのことは、日本語の特殊性が災いし、一見しては分からない。単数で用いられ、かつ大文字で

書き出されているであろう「国際語」は、政治的か経済的かは知らないが覇権国家の国語と言う意味しかない。そのような意味での国際語になる意思是、もともとフランス語にはないだろう。また、フランス語に国際語としての失格を宣言することで東京都が他のどの言語に媚を売ろうとしているのか詮索するのも無意味だ。国際語とは常に複数形で書かれるべきだからだ。国際語とは、同じ世界に共存し、数は限定されない多くの言語のことだ。言語文化圏を異とする人々のあいだに置かれる言語は、みな国際語にならざるを得ない。われわれがある一つの言葉を学び始める瞬間、その言葉はわれわれにとっての国際語としての第一歩を踏み出す。われわれの知らない所で誰かが日本語に好奇のまなざしを向けた瞬間以来、日本語は国際語である。真の国際社会あるいは正しいグローバリゼーションとは、唯一の言語が君臨する空間を目指さない。それは、誰であれ自分の使いたい言葉で、自分の使える言葉で自由にコミュニケーションが可能な世界を志向する。これはユートピアではない。ヨーロッパ連合は現実、石炭鉄鋼共同体の時代以来、通訳・翻訳に関わる財政負担を覚悟の上で、全加盟国の公用語を域内の公用語とする原則を保持している。いやおうなく国際都市化した東京都が、唯一の「国際語」を設定することで、人類の永続的共生を可能にする必須条件である、文化的・言語的多様性の尊重および他文化・他言語への敬意を否定しようとしている。これもまたわれわれを失望させ、われわれの誇りをいたく傷つける。

一審判決では、被告がフランス語の特性についてのいくつかの「事実の適示」を「真実であると信じた」相当な理由がない、とされている。だが、いわゆる公人には、また私人にすら公的な場での発言に際しては、常に真実と信じるところを述べる社会的義務が暗黙裡に課せられている。その義務の遵守なしには社会は成立も機能もしない。そもそも、「むべなるかな」は事の信憑性を主張する言い回しである。この表現を使用する限り、発言者はその「事実の適示」なるものを自ら信じようと努めるだけでなく、聴衆にも信じ込ませようとしているのだ。

この発言はフランス語に関するものであって、特定の個人に対するものではないから問題がない、ともされている。残念ながら、これは人間存在と言語の本質的一体性の無理解に基づく判断であると言わなければならない。言語は、それにより自己形成し、それにより生き続ける数多くの特定の個人なくしては存在し得ない。それに支えられる、とともにそれを支える人間がいなくなれば言語もまた消滅する。言語と、それをを用いる人々とは一体である。前者の誹謗は必然的に後者の誹謗となる。

この「事実の適示」はフランス語に対する否定的印象を一般に与え、しかも真実ではないが、それが直ちに関係者の名誉感情を侵害するとは言えない、ともされている。真実であるか否かの検討を経ていない、あるいはその検討の意思とはもともと無縁のモラルの低い言説によって、自分たちの愛着の対象がカリカチュア化される以上に無条件に侮辱感を味わわせるものはない。真実な、あるいは誠実な批判は歓迎される。真実でなく、かつ誠実さも含まぬ批判は、虚偽の巧言同様、関係者には侮蔑以外のなにものでもない。

発言内容は真実ではないから業務妨害は認められない、ともされている。しかし、問題になっている発言内容が真実でないと判断できるのは、かなりの程度までフランス語を学習した段階においてである。フランス語を学び始めたばかりで、まだ右も左も分からない学習者は偽りの発言を鵜呑みにし、学習意欲の致命的な低下をきたす危険がある。フランス語に触れたことのない人々に対しても、このネガティブなプロパガンダは確実に効果を発揮するはずだ。

そして、学習意欲の低下は学習者数の減少という形でのみ表面化するものではない。実は、それは表面化しないことのほうが多い。それは学習に際しての逡巡、疑念、集中力の減退といった形で、人知れず個々の学生の内面を蝕み、結果的に学習効果を著しく削ぐ。われわれ教員が最も恐れるのはこれである。都立大学の設置責任者の地位にある者が、そこで開講されている教科に注ぐ学生の熱意に、あえて冷水を浴びせるかのような

発言に及ぶというのは、常人の想像を絶することである。

また一審判決は、この発言は都立大の二人の先生方に対する通常見られる批判の範囲を逸脱するものではない、とも断じている。当事者同士が厳密に平等な立場で、同じ聴衆の面前で反論する機会が双方に保証された上で論を戦わせたのならば、そうも言えよう。だがこの場合、当事者の一方は両先生が奉職する大学の設置者たる都の最高権力者である。その人物による、両先生の担当科目に対する正当な根拠を欠く攻撃には、名誉毀損以上のものが感じられる。そこに明らかに読み取れるのは、恫喝の意図である。

「退嬰的」その他の発言は「都立大学フランス語講座に対して向けられたものであり、その教員に対して向けられるものではない」、との判断も示されたようだが、このように考える方は、大学の講座をどう理解しているのだろうか？

講座とは、その講座を受け持つ教員と、そこで学ぶ学生たちから成っている。講座とは、教員と学生たち自身だと言っても過言ではない。この侮辱的な発言が講座に向けられていると認定することは、その講座の構成員に向けられていると認めるに等しい。そして講座の担当者と受講生は学期を通じ確定され、固定している。ゆえに、ある講座を侮蔑することは、特定された教員と学生をないがしろにすることなのだ。

以上